
蜻蛉

さくら まき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜻蛉

【Nコード】

N5948H

【作者名】

さくら まき

【あらすじ】

夢で見たのか、それが本当にあったのかも分からない、真昼の夏のおぼろな記憶。

ゆめがたり

夏の、真昼だった。コンクリートで覆われた道路が、熱気を放っている。その横には、歩道を挟んで木や草があった。木は一定の距離を挟みながら、ここから見る限り、十本程並んでいると思われる。草は、――少し前に雨でも、降ったのだろうか。草に乗った水滴が、きらきらりと光っていた。

ふと、歩道を歩いてくる人間の気配がする。見てみると、それは少女だった。白皙の彼女のその目は、何処か空ろだがしっかりと歩いていた。少女は足を止めた。歩きながら見ていたこの草叢の中に、何かしら見つけたのだろうか。

蜻蛉がいた。ゆっくり、静かにとんでいたそれは、葉の上に止まった。奇麗だった。

蜻蛉になつて、まだ間もない蜻蛉だろう。

その時、「奇麗……」という少女の声が聞こえた気がした。口は動いていなかった。気のせいだと判った。

透明な羽は、光にあたって光り、神秘的な気持ちにさせてくれた。ふと命を感じた。

少女は前を向いて、また歩く。

空ろだった目は、何処かしつかりとしていた。

その少女は歩いていった。夏の日差しに照らされて。勢いよく

風が吹いた。歩いていた彼女の先にあつた雑木林がざわめいていた、

……こんな記憶が、何となく頭の片隅で、小さく光っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5948h/>

蜻蛉

2010年12月2日15時46分発行